

健康、安全、科学の視点で

思春期保健相談士

徳永桂子さん

1997年CAP(子どもへの暴力防止)スペシャリストとして「CAPにしのみや」を立ち上げる。その活動の中で多くの子どもの性被害に直面し、個人で性教育活動を始める。2001年カナダの性教育第一人者メグ・ヒックリングの性教育ファシリテータ養成講座終了。保育所、幼稚園、小・中・高等学校、男女共同参画センター等で性教育ワークショップを多数開催。2003年よりエイズNGO「HIVと人権・情報センター」メンバーとしてエイズ電話相談・啓発などに携わる。



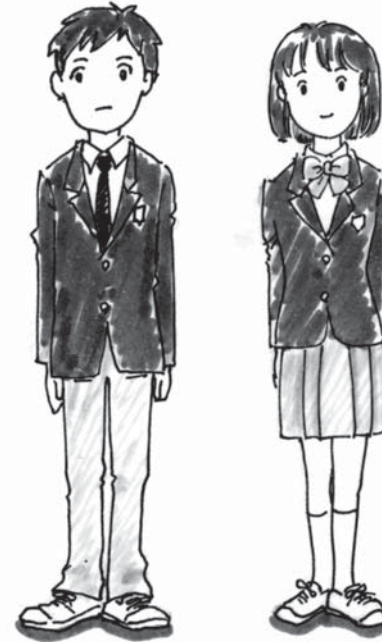
【共著】「家族で語る性教育-私たちの出前講座」かもがわブックレット
「新版人間と性の教育シリーズ第1巻」大槻書店

中学生は、脳内の性ホルモンの急激な増加で、自律神経系に影響が出たり、情緒的に不安定になりやすい時期です。また、反抗期の分、友達との関係が大切になって周り自分を比較したり、違いで悩んだりしやすい時期でもあります。今も昔も思春期の嵐を乗り越えるのは大変で、子どもがすぐ変わったわけではありません。

しかし、大きく変わったのは、社会的背景です。パソコンや携帯電話の普及により、性情報が子どもに洪水のように押し寄せています。ファッションや美容・ダイエット商品など子どもを消費者として巻き込もうとする動きや恋愛至上主義がおとなの巧妙な誘いへの敷居を低くしています。一方で、晩婚化により思春期の始まりから結婚まで平均15年以上あり、ライフスタイルが多様化してきました。その中で現在50種類以上に増えた性感染症が10代にも広がり続けています。

今こそ家庭と学校が連携して、こういった社会的背景を考慮にいたした性教育をすすめていく必要があります。身体を病気から守ること(=健康)、性被害から守ること(=安全)、またその基礎になる子どもが自分を大切に思う気持ち(自尊心と呼びます)を高めるために身体について正しく学ぶこと(=科学)の3つの視点を持つ全人的な性教育は、メディア情報を批判的に読み解く力も育てます。性行動の低年齢化を抑えるために、禁欲教育の必要性を説く声も耳にします。しかし、子どもたちが性的に自立しないまま、自分を受け入れてくれる誰かに寄り添いたいと思うところに性行動の危うさが生まれているのです。国連が世界の性教育に関する68の調査をまとめて出した報告書でも、「効果的なプログラムは最初の性交を遅らせ、性的に活発な若者をHIV(エイズウィルス)を含む性感染症や望まない妊娠から守るのに役立っている」と結論されています。性も含めて子どもにきちんと向き合えるかどうか、おとなが問われているように思います。

思春期の子どもたちとどう語る? いのちのこと



子ども扱いきれない、かといって大人とみるには少し無理な思春期の子どもたち。中学生の子どもをもつ親たちの共通の悩みは性や命について思春期を迎えた我が子とどう向き合うのかではないでしょうか。さなぎから蝶へ変身する前の子どもたちに大人として命について語りかけるために一緒に考えてみませんか。

中学校の『いのちの授業』

中学生の子どもがいる親として気になるのは、芦屋市の中学校では、性の教育をどのようにしているのかということ。そこで芦屋市立精道中学校の養護教諭、山本珠美先生に伺いました。

中学校では、保健の授業で中学1年生の時には心身の発育・発達など科学的な内容を学び、2年生で環境問題など健康な生活について、3年生で病気の予防としてエイズなど感染症についても学びます。教科以外にも道德などの時間に男女交際などについて担任の先生が授業を担当することもあり、それぞれの中学校によっては、学年や全校の講演会もあるとのことでした。

精道中学校では、助産師さんに命のはじまりや妊娠・出産について講演をしてもらっているようです。事前に生徒から疑問に思うことを書いてもらい、それに応えた内容も盛り込んだ講演になります。生徒たちの疑問は多岐にわたり、出産に対しての素朴な疑問から、病院のたらい回しなど社会に対するもの、性について間違った情報への対策を問うメディアリテラシーの疑問、出産時に男性はどのように妊婦をフォローすべきかなど様々。講演後、生徒たちの感想を読むと講演内容をどのくらい理解してくれたか手ごたえを感じることができます。子どもたちには中学校卒業までに正しい知識と情報を判断できる力をつけてもらいたいと語っておられました。(村上)

きいてみました! 我が家の「こんなこと」・「あんなこと」

家族みんなで見守った3人目の出産

長男中2、次男小6の時、婦人病の疑いで検査すると妊娠との結果。今まで自然な形で出産をしてきたので、助産院を選び家族みんなの立会いのもと、新しい命を迎えることができました。

長男は「本当に死ぬかと思った。自分たちも産んでくれたこと感謝するわ」次男は「あんな苦しいことやってのける女性はずばらしい、尊敬する、女性は大切にしなアカン」兄たちは妹をとっても可愛がってくれます。(Y)

親になる覚悟をもって

何より、子どもは望まれる時に生まれるのが一番幸せ。親になる覚悟がないなら慎重になること。(W)

親子でお風呂

娘は一人っ子なので一番身近な異性は父親。小さい時からパパとお風呂に入ること、自然に男女の体の違いを知ったようです。(S)

赤ちゃんはどこから生まれてくるの

「女の子には、おしっこの出る穴とうんちの出る穴、真ん中に赤ちゃんの出る穴の3つの穴があるんだよ。大事な赤ちゃんが出る穴が汚れないように拭かないといけないし清潔にしないといけないね」と、小さい頃、娘に聞かせてきました。(H)

お赤飯の思い出

子どもが初潮を迎えた時、お赤飯を炊きました。その時、自分の妊娠と流産の経験、出産したときの喜び、あなたが生まれてきてどんなにうれしかったかを話しました。生理とは命の誕生に繋がることだから、男の子女の子問わず、ふざけたり冷やかしたりすることではないとも話しました。(N)

出産の思い出

チアノーゼ状態で生まれた子の小さな手の爪があずき色になっていたのを見た時は、もうだめではないかと思った。健康で生まれるのは当たり前ではなかったということを実感した。(M)

レディースメモリーを贈る

自分のからだを自分で管理するための女性健康20年手帳(レディースメモリー)を持つといいと講座で学び、自分と将来の娘用に2冊購入。数年後、娘が初潮のときにプレゼントしました。(K)

思春期の子どもをもつ親にとって、子どもと向き合って命について話し合うのは、ハードルが高いのかもしれませんが。しかし性についての情報が氾濫している現代社会において、正しい知識を学ぶことはとても大切なことです。

まず自分自身の身体のしくみをきちんと知ること。それによって自分の身を守ることがいかに大切か理解できます。自分がかげがえのない大切な存在だと自覚することで、自分の周りの人たちもそれぞれが大切な存在だと気づくのです。

一人の大人として思春期の子どもたちと向き合い、命の大切さについて語り合うのは、子どもはもちろん、大人にとっても命を理解する大切な時間なのです。